

## 大阪湾におけるヨモギホンヤドカリの分布

山田 浩二 (貝塚市立自然遊学館)

### はじめに

ヨモギホンヤドカリ *Pagurus nigrofascia* Komai, 1996 (図 1) は日本国内の海岸の潮間帯に生息する小型のヤドカリであるが、1996 年の原記載からまだ日が浅く (Komai, 1996)、函館湾や博多湾では普通に見られるが、未だ全生息域が把握されていない (三島, 2003)。筆者は 2007 年に大阪府貝塚市の二色浜で本種が多数生息していることを確認し、さらに過去の画像データから少なくとも 2004 年には貝塚市の海岸に生息していたことが判明した (山田, 2007)。これまで貝塚市内のみならず、大阪湾での本種の生息が見落とされてきたと思われる原因として、本種は主に冬季に多くの活動個体が見られるとともに、形態の似たケアシホンヤドカリとの思い込みで、誤認されてきたことが考えられる。本稿では、大阪湾東部海岸周辺での本種の分布状況を把握する目的で調査を行った結果を報告する。



図 1. ヨモギホンヤドカリ

### 調査方法

2010 年の 2 月から 3 月にかけての干潮時、大阪湾東部周辺の海岸の 12 地点でヤドカリ類の採集を行った (図 2)。調査地点と調査日、調査時間帯は表 1 に示し、各調査地点の環境は図 3 に示した。調査地では水深約 20 cm の水温を計測したのち、15~30 分間、潮間帯で地表活動している個体をランダムに素手で採集した。採集したヤドカリ類は館に持ち帰り、種ごとに個体数をカウントした。これらの調査によって採集したヤドカリ類は、70%エタノール液浸標本として自然遊学館に保存した。



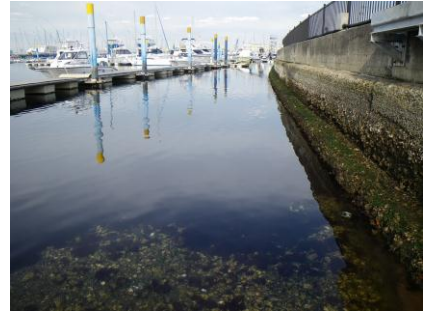
図 2. 採集地点 (●)



地点 1. 甲子園浜



地点 2. 高師浜



地点 3. 泉大津ヨットハーバー



地点 4. 阪南二区 (干潟)



地点 5. 阪南二区 (石積護岸)



地点 6. 二色浜突堤



地点 7. 男里川河口



地点 8. せんなん里海公園



地点 9. 長崎海岸



地点 10. 田倉崎



地点 11. 布引



地点 12. 片男波

図 3. 各調査地点の環境

表1.各採集地点の場所と調査日、時間帯、水温

地点	調査場所	調査年月日	調査時刻	水温
1	西宮市 甲子園浜	2010. 3. 3	15:00~15:30	12.1°C
2	高石市 高師浜	2010. 2. 16	16:00~16:30	6.2°C
3	泉大津市 泉大津ヨットハーバー	2010. 2. 17	15:00~15:30	6.6°C
4	岸和田市 阪南二区(干潟)	2010. 3. 2	13:50~14:10	13.2°C
5	岸和田市 阪南二区(石積護岸)	2010. 3. 2	14:30~15:00	11.2°C
6	貝塚市 二色浜突堤	2010. 2. 19	17:30~17:45	—
7	泉南市 男里川河口	2010. 2. 14	13:30~13:45	6.3°C
8	阪南市 せんなん里海公園	2010. 2. 14	11:40~12:00	—
9	岬町 長崎海岸	2010. 2. 20	16:30~17:00	9.7°C
10	和歌山市 田倉崎	2010. 2. 20	15:15~15:45	12.5°C
11	和歌山市 布引	2010. 3. 14	15:15~15:45	15.2°C
12	和歌山市 片男波	2010. 3. 14	12:20~12:50	—

## 結果と考察

12 地点で確認されたヤドカリ類は、ヨモギホンヤドカリ 379 個体、ユビナガホンヤドカリ 187 個体、ホンヤドカリ 119 個体、テナガツノヤドカリ 15 個体、ケアシホンヤドカリ 12 個体、コブヨコバサミ 3 個体の 6 種類 715 個体であった（表 2）。そのうちヨモギホンヤドカリは 12 地点の中で、最多の 9 地点で見つかり、採集した個体数も最も多い結果であった。これらのことから、本種は大阪湾一帯に広く分布し、冬季の海岸では最も多く確認できる種であると考えられる。

各調査地点を比較してみると、甲子園浜ではユビナガホンヤドカリが優占し、ヨモギホンヤドカリは 1 個体のみであったが、高師浜では逆にヨモギホンヤドカリが優占し、ユビナガホンヤドカリは 1 個体のみであった。

泉大津ヨットハーバーは大きな礫がなく、ヤドカリ類が少なかったが、コンクリート護岸で数個体のホンヤドカリとユビナガホンヤドカリを採集した。

阪南二区では干潟と石積護岸の調査地が隣接しており、ヨモギホンヤドカリは石積護岸の方で優占種として多く確認できたが、干潟でも採集された。これらの個体は本来の生息地である石積護岸から干潟に移動してきたものと推察される。

二色浜での採集は、近木川河口を隔てる導流堤（二色浜突堤）に沿って並んでいる大きな石積みの礫で行い、ヨモギホンヤドカリが圧倒的に優占し、わずかにホンヤドカリが 1 個体採集された。

男里川河口の採集は右岸の石積突堤で行ったため、河口ではあるが海に面しており、塩分濃度は海洋環境と近いと推察される。ここではヨモギホンヤドカリが圧倒的に優占し、ほかにホンヤドカリが 4 個体採集された。

せんなん里海公園は、人工の礫を模した環境になっており、ヨモギホンヤドカリが圧倒的に優占し、わずかにホンヤドカリが 1 個体採集された。

長崎海岸は大阪湾の湾口部から少し内湾に位置した自然の岩礁海岸であるが、ヨモギホンヤドカリがホンヤドカリと並んで多く採集された。それに対し、大阪湾のほぼ湾口部に位置し、外海の影響が強い和歌山市の田倉崎の礫では、ヨモギホンヤドカリは確認できず、ホンヤドカリが優占種であった。

布引海岸と片男波海岸との2つの採集地点は和歌川河口をはさんで接近していたが、布引海岸はより河川水の影響を強く受ける環境にある砂地で、ヨモギホンヤドカリは確認されず、ユビナガホンヤドカリとテナガツノヤドカリの2種が確認された。それに対し、片男波は護岸が老朽化し、転石状態になった箇所まで採集したところ、ヨモギホンヤドカリが確認され、ほかにユビナガホンヤドカリ、ホンヤドカリの3種が採集された。

以上の調査結果から、ヨモギホンヤドカリに適した生息場所は、大きな礫や石積護岸があり、河川水（淡水）の影響をあまり受けない環境で、多少とも内湾的な海岸にある程度限られると推察される。ただ、本種はタイプ産地である函館湾では1年を通して潮間帯で普通に見られるようであるが、博多湾で調べられた結果では初夏に潮間帯上部に移動して転石下に集合した後、秋季まで活動性が低下する（胚休眠）ことが知られている（Mishima & Henmi, 2008）。阪南二区調査地の石積護岸と干潟で2010年、2011年の2年間、各月ごとにヤドカリ類の定量調査を行ったところ、7月から10月にかけては活動するヨモギホンヤドカリが見られなかったことから（大島・山田, 2012）、大阪湾でもこのような季節的移動と生活史の特性を持っていると考えられる。

表2.各調査地点で採集されたヤドカリ類の種と個体数

種名	調査地点	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
		甲子園浜	高師浜	泉大津	阪南二区 干潟	石積護岸	二色浜	男里川	里海公園	長崎海岸	田倉崎	布引	片男波	
ヨモギホンヤドカリ		1	25		33	73	64	58	58	43			24	379
ユビナガホンヤドカリ		30	1	1	24							67	64	187
ホンヤドカリ				2		1	1	4	1	38	54		18	119
テナガツノヤドカリ												15		15
ケアシホンヤドカリ						11					1			12
コブヨコバサミ					3									3

## 引用文献

大島麻里・山田浩二（2012）甲殻類．ちきりアイランドの人工干潟における環境保全活動実践業務平成23年度報告書，きしわだ自然資料館。

Komai, T. (1996) *Pagurus nigrofascia*, a new species of hermit crab (Decapoda : Anomura : Paguridae) from Japan. *Crustacean Research*, 25 : 86-92.

三島伸治（2003）ヨモギホンヤドカリの生物地理と生活史．*生物科学ニュース*, No. 379 : 14-16.

Mishima, S. and Y. Henmi (2008) Reproduction and embryonic diapause in the hermit crab *Pagurus nigrofascia*. *Crustacean Research*, 37 : 26-34.

山田浩二（2007）二色浜におけるヨモギホンヤドカリの出現．*自然遊学館だより*, 44 : 11.